

〈礼拝説教〉 2013年 4月 7日

ピンチをチャンスに変える力！

使徒言行録 8章 1～13節、ネヘミヤ記 3章 33～35節

武田真治

1、初代教会への「大迫害」

ペンテコステの日に、この地上に初めて教会がエルサレムの町の中に誕生してから後、教会は順調に大きくなってきました。最初は120人程の集まりが、やがて3千人になり、5千人へと増え、エルサレムの町の中でも無視できない集団となって来ていたのです。

その当時、宗教的にエルサレムの町を御していたユダヤ教にとっても、初めの内は自分たちの中から出てきた、ちょっと変わった宗派程度に思われ、「ほうっておくがよい。あの行動が人間から出たものであれば自滅するだろうし」（5章38節）と余裕を持って対処されていたのですが、徐々に自分たちとは異なる教えを言い広めていることが明らかになり、特に伝道者ステファノがユダヤ教の議会（サンヘドリン）の裁判に於いて、救い主であるイエス様を殺した責任がユダヤ人にあることとエルサレム神殿だけが神様のご臨在される場所ではないという主張を公にしたことによって、キリスト教をこのまま野放しにしておくことは危険であるという認識が一気に拡がりました。その結果、今日の箇所にありますような重大な事態に立ち至ったのです。即ち「その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり」（1節）です。

これまでも、使徒ペトロやヨハネに対する個人的な投獄やムチ打ちなどはありませんでしたが、教会全体に対する公の「迫害（ディオグモス、この言葉の名詞形は使徒言行録ではここが初出）」は今回が最初でした。この迫害はかなり厳しいものであったことが、次の3節から分かります。即ち「サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた」です。伝道を禁じられる程度でなく、クリスチャンとして存在すること自体を許さないものでした。まさに「迫害」だったのです。この迫害によって嫌でも「使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリヤ地方に散って行った」（1節）でした。

2、外にも内にもあるピンチ！

しかも、この時に教会が瀕していた問題は、ただ外側からの迫害だけでなく、そのことによって内側が分裂してしまうという危機も含んでいたのです。そのことは、このような厳しい迫害にありながらも「使徒たち」はエルサレムに残ったという点に表されています。彼らに代表

される、生まれながらユダヤ教の環境で育ち、律法に従った生活を送ってきた人たちはヘブライ語を話せるクリスチャンであり、この危機に際しても表面上ユダヤ人として生活することが出来たのでした。彼はいわば隠れクリスチャンとしてエルサレムで教会を細々と守ったと考えられます。しかし、異国で育ったギリシャ語を話すユダヤ人キリスト者たちはそれが出来ませんでした。ヘブライ語を話せないということだけで疑われ、拷問に合ったのでした。ですから、エルサレムを逃げ出すしかもはや選択肢がなかったのです。ここに教会内部の分裂が起こったのです。このように内と外に大きな問題を抱えた教会は、いまや風前の灯、存続の危機と言ってよい状況でした。

3、神様の奇跡

もしここで教会の存在が無に帰していたら、今の私たちの存在もなかったはずですが、この後の教会の歴史を見る時に、このエルサレムを「散らされて行った」信者たちが、各々の落ち着き場所でイエス様の福音を宣べ伝えていったことによってキリスト教が全世界に広まって行ったのでした。思えば不思議な展開です。神様はピンチをチャンスに変えて下さったのでした。

例えば、ここで「使徒たち」がエルサレムに残ったことは、今まで彼らのもっぱら權威を持って為していた説教や儀礼を「散らされて行った」人たちは自分たちが、否が応でもその場で担わなければならなくなったことを意味します。今まで使徒たちが為して来たやり方や言葉を真似ながら伝道を始めたことでしょう。まさに、信者一人一人が伝道者となって行ったのでした。それこそ「遣わされる」という出来事の本意ではないでしょうか？

ある解説者はこの出来事を（奇跡）と呼んでいます。即ち『使徒言行録には病が癒されたり、足の不自由な人が歩けるようになったりするたくさんの奇跡が記されているが、最大の奇跡は、迫害の危機を教会が新しい歩みを始める機会へと変えてくださった事である。なぜなら、これこそ神様の御業と言い得る』と。なるほど、不可能を可能へと為さる神様の奇跡です。

私たちはどちらかと言うと、初代教会の教会は理想的な教会で順調に発展して行ったと考えている所があります。しかし、今日の箇所を読むときに、決して順調な歩みであったとは言えません。むしろ存続の危機に瀕し逃げるように信者は各地に散ばされて行ったのでした。堂々と自らの意志で伝道へと旅立って行ったという訳ではなかったのです。仕方がない形で都落ち

して行ったのです。しかし、その状況を神様が用いてくださることによって教会を新しい展開へと進ませることに変えて下さったのです。それこそ神様の御導きと御働きがあればこそであったのです。

どうでしょうか？

私たちのこれまでの生涯の歩みを振り返る時に、もう選択肢などなくそれを選ばざるを得なかったことや、どうしようもない形でそう為さざるを得なかった時ばかりの積み重ねであるように思います。自分としてはもうこれしかないと思い込んでやってしまったことは、本当はあせって早急に決断を下してしまったことであり、自分の狭い認識から下した判断でしかないことを、神様がそれでも受け止めて下さり、良き方向へと導き変えて下さったからこそ、なんとか生きて来ること出来た、続けて来る事が出来た、そのような生涯だったのではないのでしょうか？それこそ実は（神様の起こして下さった奇跡）なのではないのでしょうか？

考えてみれば、たくさんの選択肢があった上で、自分がこれがいいと判断しうまく行ったということであれば、それは自分の見識が正しかったということであって、何の奇跡でもありません。あの時はこれしかなかった、もはや選択の余地はない状態で苦し紛れに行った道が、いや、それこそ自分が「逃げた」道が、しかしなんとか生かされて新しい生き方を開かせてくださったということの中にこそ、神様の導き・奇跡があると信じたいと思うのです。

4、フィリポのサマリヤ伝道

そのようにして「散らされて行った」伝道者の一人がフィリポでした。彼が最初に福音を宣べ伝えた場所は「サマリヤ」でした、これはユダヤのすぐ隣に位置しているからという理由もありますが、何よりイエス様が「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(1章8節)と仰った言葉に即していることでした。

ここで教えられる点は「フィリポはサマリヤの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた」(5節)とある点です。彼はサマリヤに伝道をする際、自分の信仰体験やキリスト教という宗教を伝えるのではなく「キリスト」そのものを宣べ伝えたのです。もちろん、「汚れた霊に取りつかれた人々や中風患者をいやす」(7節)という奇跡も起こしています。しかし大事なことはそれらの奇跡(=しるし)は「群衆はフィリポの行うしるしを見聞きしていたので、こぞってその話(=キリストの話)に聞き入った」(6節)ことに役立ったとある点です。そしてこの話

を聞いて「町の人々は大変喜んだ」(8節) のでした。

言われていることは、ずっとユダヤ教とその本山であるエルサレム神殿に加われなくて、引け目を感じさせられて来たサマリヤの人たちにとって、エルサレム神殿だけが神様の臨在される場所ではなく、むしろ神様の名を信じ、呼び集まる者たちのその集まりの只中に主がご臨在下さるというイエス様の福音は、とても素晴らしいメッセージであると感じ取ることが出来たのではないかと考えられています。今までの呪縛から開放される思いがしたと。それが「大変喜んだ」という言葉に示されていると。

私たちの礼拝こそ(主のご臨在下さる場所と時)です。そのご臨在を証しするものが(主の聖餐)です。ここでこそキリストが語られ、キリストを受け止め、まことの「喜び」を感じる者でありたいです。そして主は私たち一人一人を愛して下さり、各々の生きる道に応じて、新しい救いへと至る道を与えようとして下さっていることを信じ、その時その時に一生懸命生きる者でありたいのです。(説教より抜粋)